

連載—三六年間の教育を振り返る⑦—

「総合的な学習の時間」とは

○「総合学習」と「総合的な学習の時間」

文科省は2002年の学習指導要領から、週3時間の「総合的な学習の時間」を設置しました。その後、「ゆとり教育」に対する批判が「総合的な学習の時間」にも向けられました。「総合的な学習の時間」は学力向上に役立つという理由です。そして、2008年の学習指導要領改訂に伴って、2011年度からは週2時間程度に削減されました。(削減の1時間は外国語に充てられました。)

どうして「総合学習」と言わずに、文部科学省は「総合的な学習の時間」というのでしょうか? 「総合学習」という授業の形は元からあって、東京の和光学園などの私学や国立大学の附属小学校などで行われてきました。教科を関連させたり、一つのテーマについて、各教科を統合させたりする学習が進められてきました。「総合学習」と言ったらいいのに、「く的な学習の時間」と何とも変な名前を命名したのは、和光と同じように見られたくなかったのか、それとも、別の主旨があったのか? それはわかりません。

○従来からある「総合学習」

「総合学習」といった実践が目されるようになったのは1970年代ですが、それ以前にも「総合学習」と名付けて良い実践がありました。例えば、大正から昭和初期にかけて、生活綴方教育があげられます。これは、生活の中で思ったこと、感じたことなどをありのままに書き発表させます。文章表現力を高めていくのが、「作文」という国語の授業だけに留まらず、現実の生活を綴ることによって現実生活をより価値のあるものに高めていきます。子どもの願い、地域の願いをみんなのものとして共有することが大きなねらいの一つとされています。日本の教師が大切にしてきた綴り方は、今では実践する教師も少なくなっています。

また、1970年になってからの新しい形の「総合学習」があります。高度経済成長期を迎

私が教師になる前からの教育の流れ

1971	学習指導要領改訂 現代化カリキュラム	今回はこの 辺りのお話
1980	学習指導要領改訂	
1985	小学校採用となつた 養護学校から小学校 で体育教師として 養護学校から小学校 教師が始まる。	七条養護学 校が始まる。
1988	学習指導要領改訂 新学力観(個性を 生活科の導入)	個性を かす教育)
1992	学習指導要領改訂 ゆとり教育 総合的な学習の時間 完全週五日制	生きる力
2002	学習指導要領改訂 ゆとり教育 総合的な学習の時間 完全週五日制	
2003	歯止めの撤回(発展的な学習)	
2011	学習指導要領改訂 ゆとり	

え、生活の大きな変化に伴って、新しい現代的な課題を学習する必要性が生じてきました。例えば、公害や環境問題、愛や性の問題、平和学習、人権学習などです。人々の生活が変化すると共に、従来にはなかった学習をする必要に迫られました。これらは、「現代的課題」として、これまでも社会科や、人権学習(同和教育)の授業として行われてきました。社会科の教科書で工業を学習する中で公害を取り上げられ、「性教育」として、保健の授業で行われたりしました。

以上のように、ある教科を発展させる「総合学習」はこれまでも数多くの実践例があり、教科の学習を深めていけば深めていくほど、その教科に留まらない側面がありました。「学習を深めれば深めるほど、総合的な内容にならざるを得ない」とよく言われ、総合は時間がかかると従来からやっていたにも関わらず、総合という目新しさに飛びついてしまった所に、私は失敗があると思うのですが、この話は次回に。

家族が語る戦争や平和

—子どもの日記から—
第六回目—満君の日記から

これまでに紹介してきた満君の日記には、時にはこのような日記を書いてきました。家族から戦争のことについて教えてもらっています。

□「傷い軍人」

満

これは、お母さんに聞いた話です。
お母さんは、大阪の平野で生まれました。小さい頃、近鉄デパートに行くことが楽しみだったそうです。

デパートへ行く陸橋の上で、白い服とぼうしをかぶった、手や足のない人が、首から募金箱のようなものを下げて、必ず立っているのです。

お母さんは、ちっちゃかったので、いつもこわくて、おばあちゃんの手をにぎり、その前をドキドキしながら歩いていました。

そうすると、おばあちゃんは、「あの人たちは、傷い軍人とゆうて、戦争でけがをして、働けないようになった人で、こわくないねん。」
と言ってくれたそうです。

「今から思うと、戦後何十年か経ってたのに、なんでいてはってんやろ。あの時でも、暮らしにくかったのに、今はどうしてるのかな。」
と言っていました。

お母さんは、戦争を知らない戦後生まれのはずなのに……

1998.1.28

□「おじいちゃんがマンションをきらうわけ」

五年 満

おじいちゃんの家は、大きすぎるので、おばあちゃんも、ぼくたちの家の近くのマンションにかわりました。でも、おじいちゃんはマンションがきらいなのです。おばあちゃんも、おじいちゃんがこわいので、おじいちゃんのことをなんでも聞くので、マンションにはかわれません。

おじいちゃんは、マンションに住むのだけは、絶対いやがります。ぼくは、なんでか聞きました。

そしたら、戦争の時に、おじいちゃんはシベリアにつれて行かれたそうです。住まされた所が、コンクリートでできた、マンションのような家だったそうです。シベリアは、土もこおるひどく冷たい所で、毎朝、友達が死んでいったらしいです。いつもお腹がすいていたけど、毎日機械の前で、せんばんをさせられたそうです。晩になると、日本の方を向いて、みんな泣いてたらしいです。

そのシベリアの事を思い出すので、マンションは便利でも、絶対に住みたくないと言っていました。

ぼくは、その話を聞いていて、ずっと戦争を思い出すおじいちゃんがかわいそうになりました。

1997.10.9

一つ目は、傷い軍人のことです。私が小学生の頃の七十年代、阿部野橋の陸橋の上で、傷い軍人がいたのを思い出します。白い服を着て、片手や片足のない人がじつと立っていました。私も満君のお母さんと同様、こわい気持ちで歩いていました。自分の小さい頃の思い出を、満君の日記から呼び起こすことができます。

二つ目は、シベリア抑留です。終戦の後、戦争に負けた日本人がソ連軍の捕虜として寒いシベリアに連行され、過酷な労働を強いられました。こころ寒い寒さの中、多くの日本人が亡くなりました。なんとか生きて日本に帰って来られた満君のおじいちゃんも、友を亡くしたというつらい思いがあったことでしょう。罪悪感に苛まれ生きて来られたことだと想像されます。便利なマンションもおじいちゃんにとっては、つらかった時のことを思い出すものとなっているのです。

おじいちゃんがつらい思い出を語るとき、満君はどんな思いでおじいちゃんの話聞いていたのでしょうか。家族の悲しみが伝わる時、その悲しみが満君の心に深く刻まれたことだと思います。

学校でも教材を通して平和や戦争について学習しますが、こういう日記を目にすると、とてもじゃないけどかなわなないと思います。家族が戦争について語る事の大切さを満君の日記から思い知らされます。